

新・昭和の風景

第⑦回 尾道(広島県・尾道市)

広島県尾道市。その歴史は古く、尾道港が公的な記録に登場するのは今から遡(さかのぼ)ること 850 年にもなる。

平成 27 年には“歴史文化とその町並み”を、さらにその翌年、“美しい瀬戸内海の風景を守ってきた村上海賊の足跡をたどる旅”の二つのテーマが、日本遺産に認定されたことも記憶に新しい。

瀬戸内海の中央に位置する尾道。ここには、450 年ほど前の中世より、銀山街道を通り出雲地方の石見銀山の銀が運ばれた。

現在では本州と四国を結ぶ西瀬戸自動車道、通称「しまなみ海道」の発着地点でもある。

東西 8 キロ、南北 2 キロの旧市街地は、対岸の向島との間を、最大幅 200 メートルの尾道水道と呼ばれる、川のような海が流れ、そこを行き交うフェリーは「日本で一番短い船旅」とも称され、旅人の心を癒(いや)してくれる。

また、商人の町としても栄えた尾道。派手な生活は慎みながらも、文化人を迎え入れ、時に

彼らに惜しみなく支援をするという、独自の文化・風習・風情を楽しんでいたよう。

●尾道と文化人

尾道には三つの黄金期があったと言われている。中世は商業都市として、また、江戸では北前船の寄港地として栄え、さらに昭和には重要港湾指定を受け、造船景気も相まって、尾道の街は毎日が祭りでもあるかのようになり、人が活気づいていたと…。

そんな尾道に居を構えた志賀直哉は『暗夜行路』に尾道の光景と人情を、一方で多感な少女期を過ごした林芙美子は『放浪記』に駅前の風情や暮らし、食堂で両親と食べたうどんの味などを叙情的に綴(つづ)っている。

志賀直哉の弟子、名画『東京物語』を生み出したのは小津安二郎監督。直哉はロケ地を探す小津に、「風情と家族愛を語るには尾道を舞台にするのが一番」と伝えたとか。



渡船に乗り「日本で一番短い船旅」を



志賀直哉の旧居



林芙美子像



『東京物語』のロケ風景

また、NHK 連続テレビ小説が国民的支持を受け、新人をヒロインに起用する、今では当たり前となった作品スタイルを初めて確立したのが、林芙美子原作で、その半生をドラマ化した尾道が舞台の『うず潮』。

以降、現在も尾道を舞台とした映像作品はさまざまな形で続き、小説の町、映画の町、ノスタルジックな町として、映像作家や表現者たちの聖地として語られている。

●尾道と風景

変わらぬ尾道の路地・坂・町並み。すべてが昭和のあの日のまま。戦災にあわず、時代の流れに沿った開発もなく、山手、海岸通り、久保新開のおおのの界隈に、小説世界の舞台が今もその姿を残している。

尾道の楽しみ方は？と尋ねられたら、まずは

千光寺公園の展望台をお勧めしたい。

眼下に広がる木造建築、その先に見える山陽本線。そして商店街、尾道水道に向島。そのまた先に瀬戸内海の備後灘、遠くに見える四国連山。島の上に海があり、また島がある光景。不思議な木造建築や、入り組んだ路地、走り抜ける子供たち…昭和時代がそのままに目に飛び込んでくるよう。

見ている風景を写真に収め、モノクロ変換したならば、『東京物語』が、そして文章に置き換えたならば、まさに『放浪記』の世界が目の前に広がる。

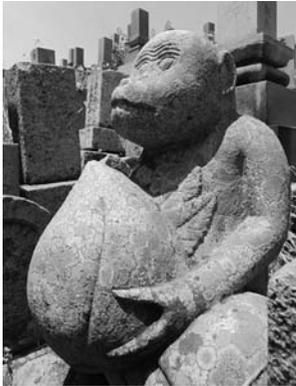
展望台から文学の小道を歩いて麓（ふもと）へと。道すがらの路地が貴方を迷路に誘い、割ぼう着を着た母の姿が浮かび、あの日の昭和の空間がそこに待っていることだろう。迷子に



千光寺からの眺望



入り組んだ路地



猿の形をした墓

なっても大丈夫。必ず寺や開けた場所に出る。まるで探偵気分、それが尾道の楽しみ方なのである。

●墓に見る尾道

寺に出たら、ちょっと寄り道。境内の墓地には、不思議な墓がある。猿やひょうたん、はたまた船のような形など。

数百年前の、一般的には墓石に女性の名前が刻まれないころの時代のものに、夫婦の名が連なる立派な墓が沢山ある。また、生まれて間もない子が旅立ったのだろうか、小さな墓もある。

尾道人は、女性をとっても大切に、そして子供も大切に。それも尾道なのである。

●晩寄りさんと新開エリア

商店街の路地へと向かう。懐かしい八百屋が開店し、尾道の昭和の風物詩に、「晩寄(ばんよ)



商店街の八百屋



昭和の風物詩「晩寄りさん」

りさん」と呼ぶ商いがある。夫婦二人で漁をし、その日釣り上げた新鮮な魚を手押し車に乗せて路上で販売、売り切れたらそれで本日の営業は終了。何とその歴史は豊臣秀吉の時代にまで遡(さかのぼ)る。

そして久保新開界限(かいわい)へと。ここは“100年酒場”とも呼ばれる歓楽街。尾道の昭和の黄金期と共に生きた、周囲700メートルのエリアには600件もの飲食店。現在は営業する店も少なくなり、少し寂(さ)びれはしたものの、それでも200件もの店を数える。

日中は仕事の意見で交差する感情も、夜このエリアに入ると呉越同舟、それぞれに宴(うたげ)に花が咲く。

不思議な三階建ての木造建築も目を引き、築70年超えの建物が整然と立ち並ぶ。昼間の人通りはなく映画の書き割りセット。薄暮の時間になれば、ポツリポツリと点灯する提灯(ちょうちん)にネオンサイン。

猫が通りを横切る時間になると、妖艶(ようえん)な世界が始まる。初めてのお店は不安なものだが、そっと暖簾(のれん)をくぐってみ



「100年酒場」と呼ばれる久保新開界限



昔ながらの木造三階建て



訪れる人々を温かく迎え入れる尾道

てはいかがだろう。「旅行の方ですか？どうぞどうぞ…」と温かく迎えてくれる。

● “あの日のあなたに会う” 尾道

尾道の町並みは、一つ路地を巡ると、“あの日のあなたに会う場所。あなたが貴方に出会う場所”。

文学と映画のまち・尾道、そして今は世界的なサイクリストの聖地。その始まりは、小津安二郎監督の名画『東京物語』であったことを知る人は少ない。

ヨーロッパで今も大人気の、芸術作品としての『東京物語』。海外の学生たちにとって尾道は、『東京物語』だけではなく、中世における武将や銀山街道、そして村上海賊の調査も兼ねて訪

ねる街だった。

来尾したヨーロッパ圏の学生の移動手段は専ら自転車。生活橋としてのしまなみ海道は、自転車で島々を渡ることができ、海の上も走れる。その話題は、10年も前からヨーロッパで知れ渡っていたようだ。

昭和の形がそのまま残る尾道の町並みを自転車で走り、中世の歴史ロマンや小津ワールドを調査研究する。尾道は生きた昭和時代を体感できる地なのだ。尾道を訪れる旅人も同様、あの日の何かを探しに来られるのではないだろうか。

小さなエリアの箱庭的町並み。路地や坂道に、古い建物群。“あの日の私に出会う場所”。それが尾道なのかもしれない。

写真・文：村上宏治、取材協力：田邊良造（アンデックス株）